

白雲片片

第十五回

香巖撃竹

きょうげんげきちく

今回は香巖智閑禪師と、本師の瀧山靈祐禪師が登場する古則を紹介致します。

正法眼蔵三百則 第十七則

『鄧州香巖寺襲燈大師、其の性、聡敏なり。瀧山の会下に在りて、多聞博記なり。瀧山、一日云く、汝が尋常に説く所は、尽く是れ章疏の中より記持し得来る。吾れ、今、汝に問わん、汝、

生下して嬰兒為りし時、未だ東西を弃ぜず。此の時に當つて、吾が与めに説き看よ。師、下話し並びに道理を説くに併

びに相い契わず。又た平生集むる所の文字に於いて尋ね究むるに、総べて此れ箇の相い契う時節無し。乃ち歎き悲しみ泣き、諸の文字を將つて、火を以つて熱却し、乃ち云く、我れ此の生に敢えて禪を会することを望まじ、且らく山に入りて修行せん。便ち武当山に入りて、忠国師の旧庵の基に庵を卓つ。一日道路を併浄し、棄礫、竹を撃つて響かす。時に於いて忽然として大悟す。乃ち頌有りて云く、一撃所知を忘ず、更に自から修治せず、動揺を古路に揚げ、悄然の機に墮せず、処処に縦跡無し、声

色の外の威儀、諸方の達道の者は、咸な上上の機と言うべし。瀧山、聞きて云く、此の子、徹せり。』

現代語訳／「瀧」は瀧山靈祐禪師、「師」は香巖智閑禪師。

中国の鄧州にある香巖寺の住職だった香巖智閑禪師（襲燈大師）は、生まれつき人の話を聞けばすぐに正しく理解し、頭の働きが非常に優秀でした。瀧山靈祐禪師の下で修行をしていた頃の話ですが、とても勉強熱心で、いろんな人から教えを聞き、經典や祖録に精通していました。ある日、師匠の瀧山靈祐禪師が香巖智閑禪師に質問をしました。

「お前が常日頃、説いていることは、いずれも經典や祖録などの書物の中の文章を引用しておる。わしは今からお前に次のような質問をしてみたい。お前が生まれてすぐの頃は、東も西も分からなかったであろう。お前がそういう生まれだての赤ん坊で、本を読んだこともなく、字を知らず、言葉も知らない状況であることを想定した上で、仏教について

自分の見解を言ってみる。」

そこで香巖智閑禪師はいろんな言葉を述べ、釈尊の説かれた道理を説明しましたが、今まで本を読んで記憶したことや、人から聞いた話を述べることになってしまいい、自分自身の体験を通した上での言葉を述べることができず、瀧山靈祐禪師から認めてもらえませんでした。

そこで、日頃から集めていた本を開いて文字を追いましたが、師匠の質問にピッタリ適合する言葉を見つけたことはできませんでした。

香巖智閑禪師は非常に落胆し、自分の未熟さを悲しみ泣き、集めた本を全て焼き払い、そこで言いました。

師「この生涯で釈尊の教えをつかむことを望むのはやめて、しばらく山の中に入って修行をしよう。」

そう決心すると、すぐさま武当山という山に入り、昔、南陽慧忠禪師が住んでいた粗末な建物の跡地に小屋を建てて生活を始めました。

ある日、道を箒で掃いていた所、箒に当たって飛んだ小石が竹に当たり、「コツン」と音が鳴りました。香巖智閑禪師はその音を聞いた時、ハッと気がつき、釈尊の教えがどういものであるかと

いう事を、体験を通して自分のものにするのができました。そこで詩をつくり、瀧山靈祐禪師に献上しました。

箒で掃いた小石が竹に当たった音を聞き、今までの意識を全て忘れ去ることができた。

更に自分で自分を縛りつけることをしなくて済むようになった。

動作が祖師と同じような状態に達し、しょんぼりとする機会がなくなった。

日常、自由自在に行動するけれども、その後に後悔や反省が残るような、わだかまりがなくなかった。

耳や目でとらえられることとは違う、表現できないような威厳のある状態が具わった。

あちこちにいる仏道の達人たちは皆、私のことをこの上なく優れた素質の者だと褒めるだろう。

その詩を伝え聞いた瀧山靈祐禪師は言いました。
瀧「あいつは釈尊の教えをつかんだ」

この古則から教えられることは、仏教の知識があるとか頭の回転が優れているからといって、仏道に関して優れているとは限らないということです。

頭が良くて勉強ができる人は自分の頭の良さに頼ってしまいい、身体を使った体験というものを疎かにしやすいと言えます。また、体験を通した事実よりも、頭の中の理屈に拘泥する事もありえます。香巖智閑禪師は生まれつき頭脳が優れていたという点からも、恐らく経典や祖録を読むことが好きだったんだと思います。そして、自分が勉強して知った事をいろんな人に話していたんでしよう。その様子を知っていた師匠の瀧山靈祐禪師が、香巖智閑禪師にもう一步前へ進んで欲しいという思いから、香巖智閑禪師が行き詰まるような質問をわざとしたんだと思います。

小石が竹に当たった音を聞いて、なぜ気がつくところがあつたのかをはつきりさせることは容易ではありませんが、その要因としては、香巖智閑禪師は日頃から人一倍、経典や祖録に目を通し、祖師の言動をよく知っていたはずですので、すでにかなり高い思想水準を有しておられただろうということ、また瀧山靈祐禪師という稀代の禅匠の下で修行され、日々坐禅をされていたということ、悄然としながらも求道の

火は消えていなかったこと、実際に目の前で起きた、小石が竹に当たって音が鳴るといふ何気ない事実こそが自分が生きる世界の実体であり、自分もその実体そのものであり、間違っても頭脳の中で生きているのではないという事実に気がつかれたのではないかということ、他にもいろいろあるかもしれませんが。

私は、香巖智閑禪師が素直に自分の力量の無さを悲しみ、受け入れたその態度こそが実に素晴らしいと思います。それまでいろいろな知識を蓄えてそれなりに自信があつたのだと思いますが、悔しく歯痒い思いをされたのにも関わらず、投げやりにならずこういつた事跡を残されたことに対し、非常な尊敬の念を抱きます。

この古則を読んだ時に、一つの話を書き出しました。

昔、鳥窠禪師（鳥の巢禪師）と呼ばれた道林禪師という唐代の祖師がいました。この方は鳥の巢のように生い茂った大きな松の枝の上を好んで坐禅をしていたことから右の名称で呼ばれたそうです。

当時の有名な詩人である白居易（白楽天）が道林禪師の噂を聞いて訪ねたそうです。そこで白居易が道林禪師に質問をしています。

白「釈尊の教えの大意は何でしょうか」

林「諸悪莫作（悪い事をしない）、衆善奉行（善いことをする）だ」

白「そんなことは三歳の子供だって知っていますよ」

林「三歳の子供でも知っているかもしれませんが、八十歳の老人になってもなかなかできんじやないか」

白居易は道林禪師の言葉に感嘆して礼拝し、以後、度々参禅したそうです。

道林禪師の最初の答えは「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」という七仏通誡偈と呼ばれる偈文の前半部分であり、毘婆尸大和尚を初めとする過去七仏全員が一貫して説いたといわれるものです。和訳すると「もろもろの悪い事をせず、もろもろの善いことをする、自ら其の意（こころ）を浄くする、是れがもろもろの仏の教えなり」です。

道林禪師の最初の答えに対して白居易は、和尚さん、もうちよつとマシな事を言ってくれと言いつ返しています。それ

に対する道林禪師の切り返しが強烈です。この道林禪師の答えに、仏教の重大な部分が説かれていると思います。

道林禪師は、知っていると何かを言えるということだけでは、まだ中途半端だと言っているようです。なぜかと言いますと、釈尊は理論を残されましたが、理論は道案内のようなものであって、内容からすると、結局は人間の行動、動作に焦点を当てておられるからです。

私たちは、頭で何かを理解した時点で、自分は何かを成し遂げたかと錯覚しています。議論で人を言い負かした時、自分の演説に人が酔いしれた時、自分に実力があると錯覚しています。社会の中には、知識のある人や弁舌の得意な人は優れた人物であると思われ、まづ学力が高いことが望まれ、学力が高ければ優秀な生徒だと見なされることが多いのではないのでしょうか。しかし、学校の教科書の内容を頭脳で理解した時点で、自分には何らかの正しい面があると錯覚を起こしています。ただ単に、自分の頭脳の中で解釈をしただけであって、その人間が正しいということには全く関係がないのにも関わらずです。釈尊の教えは、

こういう人間特有の錯覚を叩き壊すような優れた教えです。道林禪師は、人間が陥りやすいその落とし穴を見事に言い当てておられます。

釈尊の教えは頭脳における理解に留まる事を大変嫌っているというところを感じています。ただ、ややこしいことに、頭脳における理解にも一定の価値は置いておられるとも感じています。ですから、理論と実践の両方がなければならぬというところになるかと思えます。その教えは大別して、「やる」という行動があり、「やらないでおく」という行動があります。

私たちが頭の中で分かっていることと私たちの行動というのには必ずしも関係があるわけではありません。例えば、釈尊の教え全てを頭脳に打ち込んで記憶したとしても、それが行動に出せるか出せないかは別問題です。そうすると、どうしたら行動に出せるのかが問題になってきます。

祖師の教えを拝見すると、仏教は坐禅を実践することを前提に成り立っているようです。坐禅をして身心を均衡の取れた状態にすることで、頭でいくら分か

っていたとしても必ずしもできるわけではないことを、自然とできるようになるのではないのでしょうか。頭で考えてから「諸悪莫作、衆善奉行」をやるのではなく、感覚的に、やるべきこととやらないでおくべきことの判断がつくようになるのだと思います。これは、考えるとか考えないということや、分かれるとか分らないという水準を遙かに超越しています。

十六条戒は坐禅をしなければ守れないと思います。坐禅をしてもしよつちゅう破ることがあるのです。しなかつたらもつと破りそうです。また、八正道などは坐禅の上に成立が可能な教えであり、例えば正見や正思惟などは坐禅をするからこそ可能になるのだと思います。

頭脳が優秀であろうとなかろうと、要領が良くても悪くても、正しく坐禅をすれば、本人が気付くか気付かないかは関係なく、祖師と同じ身心になり、祖師と

同じ体験をすることができません。ただ、坐禅をする目的としては、単純に、釈尊の教えが知りたい、遺したいという思いが必要だと思えます。なぜなら、それがなければ長続きしないからです。また、祖師の言われる通り、坐禅は自分だけのためではなく、他者、環境への回向（回轉趣向）になることも、坐禅を続ける立派な理由になりそうです。ただ、坐禅さえやれば全く間違えない人間が育つかというところ、やっぱり必ずしもそうではなく、坐禅を毎日していたとしても、人間からかけ離れた存在になれるわけでもなく、余計な事や失敗をする時はそれなりにやるようです。

時代が移って古則の中の環境とは随分変わってきていますが、仏教が普通の教えであることは確かだと思える逸話だったかと思えます。

参考文献／西嶋和夫著「真字正法眼蔵提唱上巻一」、駒沢大学編「禅学大辞典」

